

1. た・づ・な

「備えあれば憂いなし」

日本中央競馬会
競走馬総合研究所
所長

安齊 了



少し古い話ですが・・・。

平成 19 年 8 月 15 日、お盆の JRA 六本木事務所周辺は人通りも少なく、当時は馬事部に在籍していた私は、家族一緒に都内のレストランで夕食をとる予定でした。のんびりした空気が漂う午後 2 時過ぎ、美浦トレーニング・センターの競走馬診療所から馬インフルエンザの疑いとの連絡が入ってきました。まさか？ 最初に頭に浮かんだ言葉です。しかし、それは間違いなく 36 年ぶりの馬インフルエンザ発生を知らせる第一報でした。

実はこのとき、JRA では馬インフルエンザの診断に市販の簡易検査キットが使えるかどうかについて、トレセンの診療所で臨床試験を行っていました。この検査キットは馬用として開発されたものではなく、その少し前から大きな社会問題となっていた人や鳥のインフルエンザ検査のため、民間会社が競って開発したもののひとつです。あまた市販されていた検査キットの中から馬にも適したものを選別する研究を行い、その最終段階として使い勝手や“間違っただ反応がでないかどうか”を、数ヶ月の期間をかけて競走馬で実際に確かめていたところでした。まさにその中から、“本物の反応”が見つかったのです。

JRA では常に最新の伝染病発生情報を世界各国から入手分析し、新しい検査法の研究開発を進めています。臨床現場でもできるものから順次その応用を始めます。馬インフルエンザの発見が遅かったのではという批判も一部ありましたが、実際にはこのような先を見据えた事前の策を講じている中で早期に発見できたのです。防疫課長であった私はすぐに妻へも短い電話をかけましたが、すでに東京まで出てきていた妻と娘二人は、三人で簡単な食事をしてから自宅のある栃木県へ早々に引き上げたそうです。

またこのとき、検査キットとならんで馬インフルエンザ対応に威力を発揮したのがワクチンです。馬インフルエンザは、昭和 46 年にも関東を中心に大きな流行がありましたが、そのときワクチンは未だ開発されておらず、ウイルスに襲われた施設ではほぼ 100%の馬が発症して高熱とひどい咳に悩まされました。ところが、平成 19 年の際の発症率は JRA 競走馬で 10%程度であり、昭和の流行時に認められた重症例もまったく見られませんでした。このことは何よりも、競走馬へのワクチン接種が徹底されていたことが大きいと考えられます。

インフルエンザウイルスはとても変異(変化)しやすく、変異するとそれまでのワクチンが効きにくくなることをご存知でしょうか？これは人も含めてすべてのインフルエンザウイルスに共通する性質です。そこで大切なのが、最も新しいウイルスを捕まえてそれをワクチンにするという作業です。この原始的とも思われる作業こそが、効果のあるワクチンをつくることに直結するのです。馬インフルエンザワクチンも、ウイルスの変異に合わせて順次作り変えられており、今回の流行でも“ぴったり一致”とまでは行かなかったものの、流行した株に相当近いワクチンがすでに接種さ

れていました。そしてそのことが、被害を最小限に封じ込める結果に繋がったのです。

伝染病の発生を完全に防ぐことは不可能です、また、いつ流行が起こるのかもわかりません。しかし、予めできる限りの備えを講じておくことで、いざというときの被害を最小限に食い止めることができることは事実です。私たち JRA では日ごろからそのための努力を惜しまず行っていますが、一番大切なのは馬を飼養する皆さん一人ひとりが馬の衛生管理や伝染病対策について普段から心がけておくことです。備えあれば憂いなし。栃木へ戻った妻がその晩すぐに長丁場に備えた着替えを準備してくれたおかげで、防疫対応に追われて長く帰宅できなかった私自身の難局もなんとか乗り切ることができました。